

「岡本太郎美術館のこれまでとこれから—個人美術館の可能性をめぐって」

2015.12.6

川崎市岡本太郎美術館 仲野泰生

■ 自己紹介を兼ねて、担当した主な展覧会(岡本太郎関連)

- ・1996年 「岡本太郎追悼展」
- ・1999年 「開館記念展 多面体・岡本太郎—哄笑するダイナミズム」展
- ・2001年 「岡本太郎と縄文—いやっらしいほど逞しい美感」展
- ・2002年 「熱いまなざし—岡本太郎とメキシコ」展
- ・2004年 「こんな日本—岡本太郎が撮る×内藤正敏が撮る」展
- ・2009年 「開館10周年 岡本太郎の絵画」展
- ・2010年 「前衛下着道—鴨居羊子とその時代 岡本太郎・今東光・司馬遼太郎・  
具体美術協会」展
- ・2011年 「生誕100年 人間・岡本太郎」展
- ・2012年 「記憶の島—岡本太郎と宮本常一が撮った日本」展
- ・2013年 「Hibino onside offside 日比野克彦」展
- ・2014年 「岡本太郎とアール・ブリュット 生の芸術の地平へ」展
- ・2015年 「竹田鎮三郎 メキシコに架けたアートの橋」展
- ・2015年 「岡本太郎と中村正義 『東京展』日本の美術界に挑む」

2005～2007年 川崎市市民ミュージアムに異動

1. 川崎市岡本太郎美術館の誕生まで (映像を観ながら)

2. 「多面体・岡本太郎」の紹介から未知の岡本太郎の紹介へ。

例：主なパリ時代の岡本太郎の活動

- 1930年1月13日岡本太郎パリ到着
- 1932年パリ・ローザンベール画廊でP・ピカソ《水差しと果物鉢》1931年
- 〃 10月 サロン・デ・シュランデパンダン展に出品 (翌年も出品)
- 1933年アストラクシオン・クレアシオン (抽象・創造) 協会に入会。
- 1936年1月「コントロール・アタック」(スターリニズムに反対する「革命的知識人闘争同盟 反撃」)の最初の公開集会にマックス・エルンスト、評論家パトリック・ワルドベルグとともに参加。ジョルジュ・バタイユの演説に感銘を受ける。
- 1937年6月G.L.M社より初めての画集『OKAMOTO』が刊行。
- 1938年1月国際シュルレアリスム・パリ展に《傷ましき腕》出品。7月ジョルジュ・バタイユの推薦を受け、「アセファル」(無頭人)にジャン・アトラン等と参加。この頃

よりパリ大学哲学科、民族学科（マルセル・モース）に学ぶ。

- ① 『巴里夜話』松尾邦之助 1933年「岡本君はまだ二十歳を出たばかりの青年だが、絵の思索方面で怖ろしく熟している。」（美術批評家著作選集 第8巻 2011.1.24 監修者：五十殿利治 編纂者：江川佳秀 ゆまに書房刊）
- ② 『巴里便』松尾邦之助 1935年「岡本太郎君。相変わらずアブストラクシオン・クレアシオンに精進しているが最近ではセリグマンと小展覧会を行った。」（同上）
- ③ 『名古屋新聞』1936年2月28日7面に岡本太郎が下郷羊雄に宛てた手紙「アブストラクシオンとシュールレアリスム」が掲載。「…セリグマンや僕の仕事などは、ほとんどシュールレアリスムに近いのです。」「…われわれをもってアブストレートとは勿論呼びえないし、シュールリアリストとも呼び得ない状態にあるのです。いずれ運動が表面化して来たら通信致します。」
- ④ 『欧州紀行』横光利一 1937年（創元社）6月12日トリスタン・ツァラ邸訪問。その会合にロジェ・カイヨワやアルベルト・ジャコメッティらが参加。「夜、岡本太郎君が友人の家を訪問するから、一緒に遊びに行こうと誘ってくれたので出かけてみる。行く先はトリスタン・ツァラの家だ。ツァラはダダイズムの始祖、及び超現実派の宗家であり、山中散生（やまなか ちるう）氏の邦訳もある詩人。」
- ⑤ 『聖なる陰謀—アセファル資料集』ジョルジュ・バタイユ（マリナ・ガレット編 ちくま学芸文庫 2006年）P228 「資料46 ジョルジュ・バタイユ 1937年12月28日の規則 1. 「アセファル」に新たに参加する者は、内部集会に出席するために最初の誓約に署名し、一度森に行かなければならない。 P239 「資料50 名簿」「1. 信徒 G・A（ジョルジュ・アンブロジーノ物理学者）、P・A（ピエール・アンドラー）、G・B（ジョルジュ・バタイユ）、J・C（ジャック・シャヴィ）、R・C（ルネ・シュノン）、H・D（アンリ・デュサ）、I・K（イムレ・ケルマン）、2. 参加者 P・W（パトリック・ワルドベルグ）、3. 1938年12月28日に推薦された者 M・L（ミシェル・レリス）A・M（アンドレ・マッソン）J・R（ジャン・ロラン）S、H・W（アンリ・ヴァロン）、C・P、E・T、4. 次の定例会でG・Bによって原則として推薦される予定の者 J・A（ジャン・アトラン）、C・B、T・O（岡本太郎）
- ⑥ 『OKAMOTO』（1937年 G.L.M）「岡本と感情の裂傷」ピエール・クルチオン「…東洋の紋切り型から解放されているばかりか、西欧の偏見からも解放されている。」
- ⑦ 『美術』第11巻第5号 1936年「我々のネオ・コンクリーズム（新具象主義）」クルト・セリグマン「画壇のこれらの二つの重要な運動について述べた後に問題となるのは、少数の画家の新しいグループ、すなわち、ネオコンクリーズムである。」
- ⑧ 『岡本太郎 対極のアクロバット』パトリック・ワルドベルグ 1976年 ディフェランズ社（『岡本太郎』1979年 平凡社 針生一郎訳）  
「マルセル・モースの講義は、靈感の源泉であり、つよい刺激剤だった。」「選ばれた

活動的な共同体を生み出すことが問題だった。」

3. これからの岡本太郎美術館の方向性（人間・岡本太郎展の映像、TARO 賞の CD-R を観ながら）

- ① 多面体・岡本太郎を活かした企画展の充実（民俗学、民族学、縄文などのキーコンセプトで企画展を考えていく）
- ② 教育普及的展覧会の充実（日比野克彦展、岡本太郎を核とした普及の展覧会「岡本太郎とアール・ブリュット」展、「遊び・ひらく岡本太郎」展）
- ③ 新しいアーティストを育成する美術館（TARO 賞展の充実と活躍している TARO 賞作家の紹介）